【365】

氏　名（本籍）	中村　卓（福島県）（なかむら　すぐる）
学位の種類	博　士（デザイン学）
学位記番号	博　甲　第　6641　号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**G.Th.リートフェルトのレッド・ブルーチェア研究** －意匠・構造の特性とその歴史的意義－

主　査	筑波大学教授	博士（デザイン学）	五十嵐　浩　也
副　査	筑波大学教授	工学博士	安　藤　邦　廣
副　査	筑波大学教授		鵜　沢　　隆
副　査	京都橘大学准教授	博士（デザイン学）	河　野　良　平

論文の内容の要旨

（目的）

本論文は、近代オランダのデ・ステイル（De Stijl）運動の代表的デザイナー・建築家として広く知られるヘリット・トーマス・リートフェルト（G.Th. Rietvelt, 1888-1964）の代表的な木製家具作品のひとつであるレッド・ブルーチェア（1918-1935年頃）を対象として、意匠と構造の分析を中心にそのデザイン的特徴を明らかにするとともに、そのデザインの歴史的な意義について再検証を試みようとするものである。

（対象と方法）

本研究の直接的な対象はG.Th.リートフェルトの代表作のひとつレッド・ブルーチェアであるが、あわせてリートフェルトがデザインした他の木製家具作品との比較研究も行い、レッド・ブルーチェアの作品の位置づけを試みたものである。まず現存する4つのデザインタイプのレッド・ブルーチェアのそれぞれの作例を、その形状と素材、接合法について実測調査を行い、さらにその体圧分布測定値から構造解析を実施して、その力学的特性を明らかにした。

（結果）

第1章では、リートフェルトが活動した時代とデ・ステイル運動との関わりから、リートフェルトの家具作品の歴史的位置づけについての一般的な解釈を概観し、併せて彼の建築作品も通覧して、リートフェルトの一連の業績とデザインの特徴の変遷を俯瞰的にまとめている。第2章では、レッド・ブルーチェアの異なる4つのデザインタイプの実測調査の結果を分析し、それぞれのタイプに共通する形状の特性を抽出している。その結果、4つのデザインタイプのレッド・ブルーチェアの架構には共通する明快な部材寸法のシステムが確認され、それとは対照的に板材の構成寸法には多様な差異が認められることを指摘している。第3章では、レッド・ブルーチェアの原寸モデルを用いた体圧分布測定値から構造解析を実施し、その力学的特性について論じている。その結果、架構は着座に伴う機械的な変形と、各部材へ生じる応力とが巧みにコントロールされた合理的な構造物として成立していることを指摘して、架構部材と板材による構成と構造との密接な関係を明らかにしている。第4章では、リートフェルトの代表的な他の木製家具作品の意匠的な類型化とともに、それぞれの類型の代表的作品に関する構造解析の結果と対比させながら、リートフェルトの木製

家具作品の中でのレッド・ブルーチェアの位置づけの再検討を試みている。終章では、木製家具作品としてのレッド・ブルーチェアの構成と構造の特徴を、同時代の他の建築家やデザイナーによる家具作品の新たな試みとの比較検討を試みるとともに、その今日的な意義についても指摘している。

(考察)

多数の作例が現存するレッド・ブルーチェアの形態のデザインに内在する特徴を、架構に共通する構成のシステムとそれぞれに異なる板材の形状を実測値によって明らかにするとともに、原寸モデルを用いた体圧分布測定値から構造解析を実施して、その力学的特性について検証し、それらを構造と生産の合理性と個々の身体的差異に柔軟に適応し得るシステムとして新たに位置づけ、1918年に制作が開始されたレッド・ブルーチェアが、さまざまな試作を経て1935年頃に赤と青の塗装による周知の作例に収斂していった軌跡についても明らかにした。また、木製家具作品であるレッド・ブルーチェアは、クラフト的な制作工程と同時に、その構成的な特徴に内在する量産化の可能性としての工業製品的特徴をも併せもつ特異なデザインとして位置づけ得ることを指摘して、その後のさまざまなデザイナーによるスティールパイプによる実験的な家具デザインの試みの先駆的な作品として、近代デザインの中での歴史的再評価を提起している。また、そうした特質の中にこそ、レッド・ブルーチェアでリートフェルトが試みたデザイン手法の今日的な意義が再確認し得ることを指摘した。

審 査 の 結 果 の 要 旨

G.Th.リートフェルトのレッド・ブルーチェアを対象とした本論文は、複数の作例の詳細な実測調査を行っただけでなく、原寸モデルを用いた体圧分布測定値から構造解析を実施して、その力学的特性について精緻に検証し、これまで充分に検討されてきたとは言えない、その構造的な特性を実証的に明らかにした。また、レッド・ブルーチェアをリートフェルトの他の代表的な家具作品の中での新たな位置づけを試みたばかりか、そのデザイン的特徴を木製家具としてのクラフト的側面とともに、量産化の可能性をも視野に入れたデザイン手法として、近代家具デザインの中での先駆的な作品として位置づけた考察は、きわめて斬新かつ意欲的であり、さらにはレッド・ブルーチェアのデザイン手法の今日的な意義についても新たな知見を提起するものとして、審査委員全員から極めて高い評価を得た。

平成25年1月24日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。